

古谷誠章 ZIG HOUSE/ZAG HOUSE

2001年

中村好文 =文・イラスト
YOSHIFUMI NAKAMURA

私が教えに行っている日本大学生産工学部の「居住空間デザインコース」には、毎年、年明け早々に「宮協賞審査会」という一大イベントがあります。このコースの創設者だった宮協檀さんを記念して設けられた年度賞です。

コースの学生たちは、1年生から4年生までの全員が、その年度内に課題された3~5の設計課題のなかから自信作ひとつを選びだし、年末年始の休みの間に、その作品に手を加えいっそうレベルアップして年明けに提出します。その作品をコースで教えている教師全員とゲストの審査員が公開で審査し、学年に関係なくその年度の「宮協賞」を決定するというものです。

今年、ゲスト審査員にお招きしたのは古谷誠章さんでした。私は、その古谷さんの、論理的でありながら心情溢れる真摯な審査ぶりに目を瞠る思いをし、大いに学ぶところが多かったので、本題に入る前にここでちょっと触れたいと思います。

一次審査を通過した学生のプレゼンテーション時間はわずか4分。ほとんどの学生は作品のコンセプトや設計の意図を十分に説明することができません。その舌足らずの説明を受けて審査員が質問したり、批評したりするのですが、古谷さんは学生の説明が終わるやいなや、それこそ「間髪を入れぬ」タイミングでマイクを手に取り、的確な言葉と分かりやすい表現で、その作品の優れた点と問題点、さらに「どうすればもっと良い作品になったか」のアドバイスを、よどみなく、過不足なく語りつくすのです。

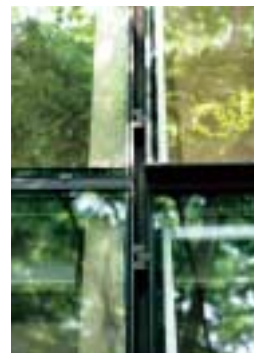
古谷さんは、どんな作品からも「優れた点」を見つけ出し、その良さを丁寧に分析して、まず、褒めます。それも、作者自身がまったく気づいていないような作品の潜在的な長所と可能性までも鋭く見抜いて「褒める」。決して事務的な感じではな

く、高飛車な感じでもなく、いかにも血の通ったあたたかい言葉で、学生を有頂天にさせるような上手な褒め方をするのです。そして、その後、「惜しむらくは…」という古風な言葉をマクラに使う（どうやらこれが古谷さんの口癖らしいです）、今度はその作品の問題点を容赦なく浮き彫りにしていきます。つまり、褒め言葉の返す刀は鋭利な批評の刃です。その論旨と語り口の妙味、作品を理路整然と切りさばく言葉の切れ味、私は胸のすく思いをしたのでした。

じつは、その審査会の打ち上げの席で、今回の「ZIG HOUSE/ZAG HOUSE」の訪問が決まりました。私は建築雑誌の熱心な読者ではありませんが、ある時、大学の研究室に届く雑誌



上—鬱蒼と茂った庭の樹々越しに垣間見る建物の外観。テラスを挟んで左側が母上の住む「ZIG HOUSE」、右側が古谷さんの自邸「ZAG HOUSE」
下—ひととおり見学を終えて、スパマンで乾杯。「お天気ならテラスで木漏れ日を楽しめながらのランチになったのですが…」と古谷さんのお言葉。「あ、それはまた、次の機会に…」と私



左—これが無垢のステンレスを削り出した特注ヒンジ。理に合った美しいディテールを見ると気持ちが洗われるようになるのは私だけでしょうか
右—食堂から入口方向を見る。観葉植物、小鳥の籠、小物を飾るショーケースを兼ねた食卓など、大らかな室内に生活の息吹が感じられる

を手に取りパラパラとめくっていた手が止まって、思わず「ほう！」と感嘆のつぶやきを漏らしたことがありました。それが「ZIG HOUSE/ZAG HOUSE」だったのです。最初の頁にこの住宅の美しい夕景写真が見開きで載っていました。その写真に見入りながら「この住宅をいつか見学させてもらおう！」と、深く心に期するものがありました。5年目にして、それがようやく実現できたわけです。

私が雑誌の写真を見て抱いた率直な感想は「なーんかアツクラカンとしているなあ」というものでしたが、それでいて、よくあるパビリオン住宅のようによそよそしい感じはなく、人肌のぬくもりが感じられました。なによりも、市井の庶民の暮らしさえもまると許容してくれそうな大らかな包容力が感じられました。たとえば私のように肩肘張らない暮らしを愛する人間でも住めそうだ、と思わせる親密な雰囲気漂っていたのです。

念願がなつて、今回、実際に「ZIG HOUSE/ZAG HOUSE」を訪ねることができたのですが、写真から受けた私の印象はまったく変わりませんでした。完成後数年を経て、写真で見たときよりも室内には家具調度や小物が増えていましたが、そのことで、確かな暮らしの気配が息づいていることがひしひしと感じられ、いっそう好ましく思いました。この住宅は、融通無碍な人の暮らしを丸ごと放り込むための「まことによくできた容器」であることをこの目で見、肌で感じて実感したのです。

ところで、その容器の作り方は独創的なアイデアに満ち、精緻を極めています。この住宅は、間伐材を圧着した編成材が構造材にも仕上げ材にもなっているのですが、「アツクラカン」の印象を生み出すために、構造のシステムや要所要所のディテールの詰めが、おどろくほど入念に、細心に、厳密になされていることに否応なしに気づかされます。古谷さんの説明に耳を傾けつつ見学してまわりながら、私は、胸一杯に息を吸い込むように大らかな空間を味わい、息を詰めて細部に見入ったりしました。建物全体から受けるダイナミックな印象が、このように入念に練り上げられた細部によってもたらされていることを見逃すと、この住宅の一番美味しいところを味わったことにはなりません。この住宅の魅力のすべてを見つくりたいと思ったら、建築的な遠近両用メガネがぜひとも必要なので



です。

ここで、その近視メガネが必要なところを1カ所、紹介します。それは、この建物の重要な要素のひとつである開口部で、大きいもので幅1m、高さ3.5mもある縦長の片開きの窓に使われている特注のサッシとヒンジの部分です。この部分はあま





りにもなにげなく納まっているので、うっかりすると見落としてしまうほどですが、無垢材のステンレスを削り出して作ったというヒンジが逸品で、金物好き、ディテール好きの私の目はこのヒンジに釘付けになりました。ここは、外壁面と開口部のガラス面をなんとしても同一（ゾロ）にしたいという意志と執念が生み出したディテールですが、完成品は「そうか、これでいいわけか」と呟きたくなくらい苦心の痕を感じさせない、スマートな仕上がりでした。

余談ですが、古谷さんは恩師の穂積信夫先生について書いた文章のなかで、なにかの折に穂積先生が「アリの胴体とお尻はどうしてあんなに小さな“ヒンジ”でつながっているんだろうね」と話したことを紹介し、「いつの日かそんな素晴らしいディテールをもつ、扉のデザインなどしてみたいですね」と結んでいますが、その「アリ並みに小さくて強靱なヒンジ」が、実は私の目の前にあったというわけです。

閑話休題。「では、この住宅で好きな場所は？」と聞かれたら、私は、まず、ふたつの棟（「ZIG HOUSE」、「ZAG HOUSE」）の背後に下屋のような形で巻き付いているちょっと名指しがたい不思議な空間（＝場所）を挙げ、続いて、これもふたつ棟の間にあるテラスと呼ばれている屋根付きの空間を挙げたいと思います。

図面から読み取れる背後の差し掛け空間は、ルイス・カーンならサーヴァント・スペースと呼ぶ場所で、「ZIG HOUSE」では、浴室や納戸にあてられ、「ZAG HOUSE」ではアトリエや

左—外部テラスは2層分の高さを持っている。古谷さんと私がいることで、このテラスのスケールの大きさと開放感を感じていただけるでしょうか？
下—「ZAG HOUSE」の背後部分。ここに浴室や洗面所などがある。この場所に案内されてみると、裏庭に風呂場やトイレがあるような懐かしい感じがありました

台所や洗面・脱衣・浴室などにあてられています。ただ、いわゆる「水まわり」と、ひとりで片付けるわけにいかないのは、この空間に古谷さんの無言のメッセージが込められているような気がするからです。もっと言うと、この空間に寓話的な物語性がひそんでいるように私には感じられたのです。

敷地の不整形の輪郭をそのままなぞったことで生まれた「異形の空間」は、明解な構造システムで組み上げられた清澄で力強い本体の軸組と鮮やかなコントラストを生み出しています。古谷さんは純粋な本体構造の背後に曖昧模糊とした空間をまとりつかせることによって「無色透明のユニヴァーサルスペースを目指したわけではない」ことを、はっきり表明したかったのではないのでしょうか。先ほど書いた、「物語性」という言葉も「住み継ぐ家の記憶」と言い換えればより解りやすいかもしれません。

もうひとつはテラスですが、これは写真をご覧いただければわざわざ説明の必要はないと思います。このテラスで古谷さんと話していたとき、私は、ふと、10年ほど前、マリオ・ボッタ設計の『リゴルネットの住宅』のロτζアで過ごした至福のひとつを思い出し、そのときのことを話しました。古谷さんは「ぼくもボッタの住宅では『リゴルネットの住宅』が一番好きです」と、すかさず同意してくれました。

先ほど「住宅の一番美味しいところを味わう」話を書きましたが、この日、私は本当に美味しいパスタランチに舌鼓を打ちました。スプマンテの食前酒から始まり、ごく自然に赤ワインに移行したその優雅なランチは素晴らしく美味しく、奥様を交えた愉快なお喋りは、たそがれ時まで続きました。ちなみに、パスタは「スパゲティ・ジェノヴェーゼ」。古谷さんがマリオ・ボッタの事務所にいたときにジェノヴァ出身の同僚から伝授されたという本格的なジェノヴェーゼで、古谷家ご自慢の定番メニューのようです。せっかくですから、古谷夫妻から聞いたレシピをご紹介しますし…あ、いけない！もうとっくに予定の枚数が尽きていました。うーむ、残念無念。✿



なかむら・よしふみ—建築家／1948年生まれ。武蔵野美術大学建築学科卒業。1972～74年、宍道設計事務所。1975年、都立品川職業訓練校木工科にて家具職人の訓練を受ける。1976～80年、吉村順三設計事務所。1981年、レミングハウス設立。
三谷さんの家（1986）、REI HUT（2001）などの住宅作品の他に、『住宅巡礼』（新潮社 2000）、『意中の建築上・下』（新潮社 2005）などの著作がある。